

亀居山大乗寺客殿の天明・寛政期における再建と修繕過程に関する研究 障壁画注文及び製作年との関連性も含めて

STUDY ON REBUILDING AND REPAIR OF THE KAMEISAN DAIJYO-JI KYAKUDEN IN TENMEI AND KANSEI PERIOD

Relation between order of pictures on partitions and year of production

木下 知威*

Tomotake KINOSHITA

The study covers the architecture of Daijyo-ji Kyakuden. Method of the study was by analyzing field conducting fieldwork, the antique documents of Daijyo-ji and research of the Japanese art history. The results from the analysis showed the following 5 aspects. 1. Preparation for the Daijyo-ji kyakuden rebuilding started from March 1794 of 1786. 2. Pictures on partitions other than between the room of wistaria, the monkey, the duck, and the peacock have been drawn for the Tenmei era. Most pictures were drawn in the Tenmei era except for the pictures in the room of wistaria the monkey, the duck, and the peacock. 3. It is thought that the old draft were produced before August 1787 when considering the year of the order and the year of production of pictures on partitions. 4. As for the room of wistaria, carp, and dog, the modification had not been done since the year of rebuilding. 5. It is thought that priest's living quarters were planes similar to the old draft, however it was remodeled from the situation of the Shingu-ji hondo after 1829 or 1830.

Keywords : Superior, Priests' quarters, Kyakuden, Tenmei, Kansei, Okyo Maruyama

方丈, 庫裏, 客殿, 天明, 寛政, 円山応挙

1 研究の目的 兵庫県美方郡香美町香住区にある高野山真言宗の亀居山大乗寺は山陰本線の香住駅から南 1.6km、円山川のほとりにある。ここは江戸中期の画家、円山応挙^{注1)} 一門が描いた全 165 面の障壁画^{注2)} を収蔵しており、通称「応挙寺」として知られている。

大乗寺については、美術史・郷土史の面から江戸中期の大乗寺住職であった密蔵上人^{注3)}、密英上人^{注4)}の業績を明らかにしたものや、障壁画の保存・観賞に関する諸問題について論じるものがみられる^{注5)}。とくに、障壁画に関する既往研究は、主に江戸絵画史^{注6)}、仏像彫刻史^{注7)}で蓄積され、詳細な検討がされている。客殿の建築については、近畿地方における近世寺院の悉皆調査とそれに基づいた報告がされている^{注8)}、年代について正確でない箇所がみられる。また、平面分類に関する研究において、大乗寺客殿及び庫裏はL字型空間で仏壇のある発展型四間取りとされるが、実際は庫裏の突出部を失った間取りであり、その理由が分析されていない^{注9)}。そこで、本論文では大乗寺客殿が建築された過程と現在の間取りに至った過程について、日本美術史における障壁画の注文・製作年の特定に関する研究成果も活用しつつ、天明・寛政期の客殿建築の一事例として明らかにしたい。

2 大乗寺客殿について 大乗寺は行基によって天平 17 年 (745) に開かれたとされている。衰退した時期もあったが天明年間の住職、密蔵上人が再興を試み、弟子の密英上人が再興を果たしたと伝わっ

ている。大乗寺の境内には山門、観音堂 (本堂)、薬師堂、鐘楼、客殿、土蔵がある。また、天明・寛政期には出石藩家老の仙石久賢が統治していたことと関連して、仙石家から寄贈された額と仙石久賢の親族の位牌が安置されている。

大乗寺客殿は桁行 16 間半、梁行 9 間半であり、入母屋造、銅板葺^{注10)} である (写真 1)。正面には唐破風の式台がとりつけられている。建物の下手側通りと大戸口に土台がある。床下をみると、礎石建である。番付は一部だけであるが、いろは・漢数字の組合せ番付で、柱の足元の背面側に書かれている。また、敷居は独鈷柄によって大引に留められている。その上には大面取方柱を立て、身舎と縁側は海老虹梁で繋いでいる。天井は仏間と上段の間が折上格天井、山水の間は格天井であり、その他の部屋は棹縁天井である。畳は京間 (6 尺 3 寸)、柱径を 6 寸とする畳割である。大乗寺客殿の平面は、方丈と土間と板間をもった庫裏を合わせたもので、方丈の中央に仏間があり、その北側に上段の間がある。1 階に 12 室、2 階に 4 室の部屋があり、円山応挙一門による障壁画がある部屋には障壁画の画意を含んだ命名がされている^{注11)}。

客殿の障壁画は、天明 7 年 (1787)、天明 8 年 (1788)、寛政 7 年 (1795) の 3 度にわたって制作されていることが明らかになっている^{注12)}。現存する障壁画を観察したところ、山水の間障壁画の一部が明治 37 年 (1904 年) 12 月 3 日から 18 日の間に盗難に遭い^{注13)}、修復されたことがある以外に切断痕は認められなかった。また、

* 日本社会事業大学 非常勤講師・博士(工学)

Part-time Lecturer, Japan College of Social Work, Dr. Eng.

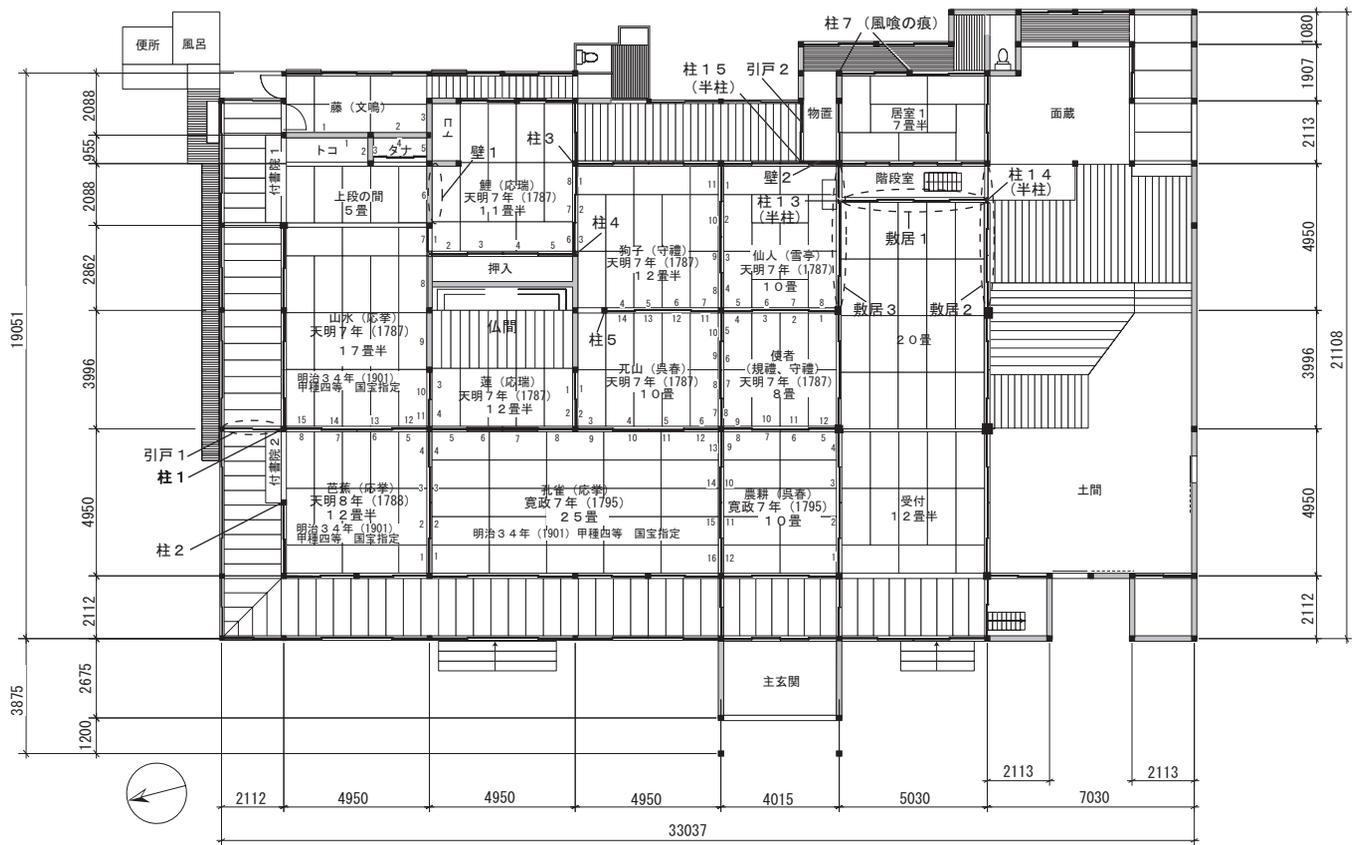


図1 大乘寺客殿 一階平面図

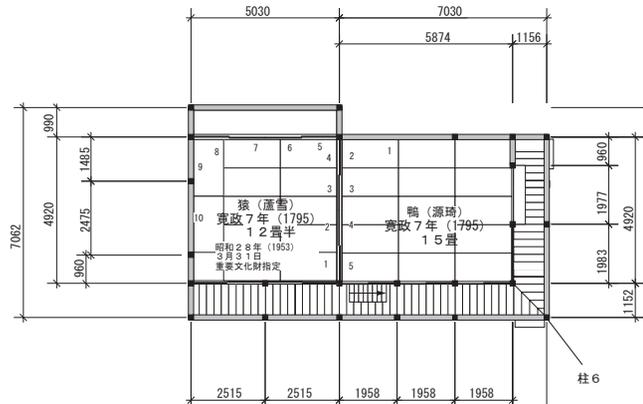
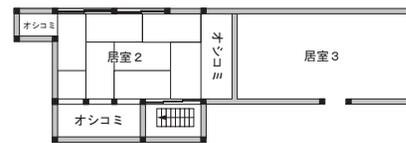


図2 大乘寺客殿 二階平面図

図1、図2の凡例について

各室の襖に付されている番号は、障壁面の番号であり、各部屋の障壁面ごとにカウントした。

図1、2の各室の中心にある文字の凡例は以下になる。

部屋の通称（障壁面の作者名）
製作年 和暦（西暦）
部屋の畳数

国宝保存法、古社寺保存法を受けている障壁面は畳数の下に記した。

指定年 和暦（西暦）
指定の種類



写真1 大乘寺客殿全景（北西側から撮影）

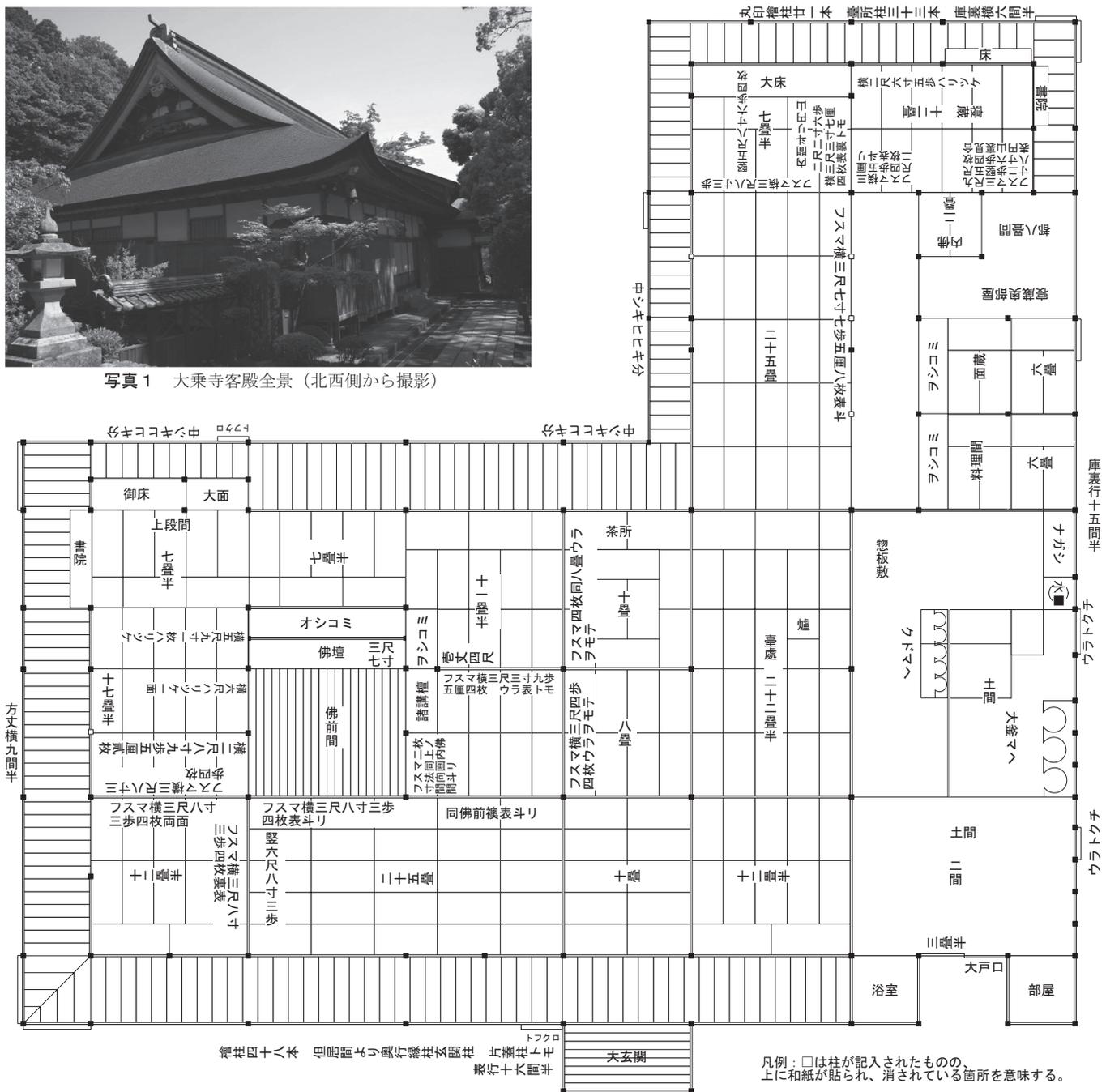


図3 大乘寺客殿古図

山水の間にある障壁画7は引戸であるが、障壁画8が前面にせり出していたために開閉できない状態であった。これを修繕するための工事が昭和28年（1953）3月30日に行われている（図1）。

大乘寺は高野山真言宗の寺院として、弘法大師の命日に客殿の元山の間を祭壇を設け、狗子、仙人、使者の間の襖を取り払い、御影供を行っているほか、お盆に施餓鬼法要を営んでいる。また、円山応挙一派による障壁画の一般公開を行っていたが、孔雀、芭蕉、山水の間の障壁画は、平成21年（2009）4月より隣接する収蔵庫に移され、複製画を客殿内で展示している。

3 大乘寺資料の分析 大乘寺客殿に関する資料は、古図、置札、昭和中期の住職であった長谷部琢道上人^{注14)}による記録が現存しており、これらを分析した。その際、必要に応じて既往研究を引用した。

また、分析のために客殿を実測し、平面図を作成した（図1、図2）。

3-1 大乘寺の再興と客殿再建の時期について まず、密蔵が天明6年（1786年）2月13日に遷化し^{注15)}、5か月後の天明6年（1786）7月に、密蔵が大乘寺を運営したいと願い出る証文がある^{注16)}。

そこで、大乘寺客殿に関する置札が2枚現存している。いずれも釘痕はなく、尖頭型の置札である。1枚目は「再建沙門現住心城房大阿迦梨密英敬白」とあり、密蔵が大乘寺客殿を再建するときに合わせて作られた置札であることがいえる。年代として「寛政六歳甲寅弥生十六日龜居山大乗寺」、工事に関わった者として「大工棟梁後見 豊岡彦四郎重賢」と書かれており、大乘寺客殿は寛政6年（1794）3月16日に建築が開始されたことと、棟梁の後見が豊岡の彦四郎重賢であることがわかる。この点について、『近畿地方の近畿社寺建築5』では寛政7年（1795）としており、誤っている。

2枚目の置札は年紀を欠くが、この工事に関わった人たちによる「造営世話頭人」の札であり、「豊岡彦四郎門人 森村大工 青山常吉」をはじめ大工・杣人・鍛冶・葺司ら85名の名前と、セヶ村の造営世話頭人23名の名前が記されているものである。この札より、但馬全体から大工らが集まっていることがわかる。

1枚目の置札には、「再建」と記されているが、これは客殿とされた建築をもう一度建設することを指すのか、あるいは前述の証文のとおり、天明6年(1786)7月から密英が大乗寺の再興に関わってきた一連の行為を指すのかという問題が生じる。本稿では、決定的な証拠を見出せないため、どちらか一方を指すのか、あるいは両方を含蓄しているのかという3つの可能性を指摘するに留めたい。

3-2 古図 大乗寺には、3枚の和紙を継ぎ足しし、墨で書かれた図面が現存している。図面全体は516×560ミリで、さらに和紙を裏打ちすることで補強されている。年紀と表題を欠くが、「庫裏十五間半」「方丈横九間半」「庫裏横六間半」と記載されているように、方丈と庫裏が一体となった客殿建築の平面図である。柱の素材、本数、襖の大きさと枚数が記入されており、計画の具体性を認めることができる。図2と比較し、大乗寺でこの図面と類似性が認められるのは客殿だけであり、客殿の計画図であると考えられる。また、置札より寛政6年(1794)を遡って作成されたと考えられる。河野元昭氏によれば、密英によって作図されたとしているが^{註17)}、柱の本数と木材名が記入されている点から大工棟梁の手が加わっている可能性も否定できない。これを本稿では「古図」と呼ぶことにし、採寸と清書を行なった(図3)。次の4と5では、古図と現状および既往研究を分析したときに見出された点を論述したい。

4 大乗寺客殿の方丈について ここでは、大乗寺客殿において調査を行ったところ、発見が見られた式台、芭蕉の間、鯉の間、藤の間、狗子の間について、順番に考察していくこととしたい。

4-1 式台について 農耕の間の手前にある玄関を、古図では「大玄関」と記載されており、現在は「主玄関」と呼び、円山応挙の銅像を設置しているが、これは式台と呼んでよいと考えられる。床下調査を行ったところ、踏面と蹴込、力桁と側桁は鏝で留められ、角釘が使われているので、工事時期は近代を遡ると考えられる。そして、床板の側面には正面から向かって右から順番に「壺」「二」「三」と墨書による番付が付されていた。式台の床下には平成17年(2005)にジャッキアップの工事が行われ、部材が交換されたために当初の状況を伺うことはできない。式台の欄間の裏側に「文政六年癸未年新調」と中井権治正貞以下5名の彫物師の名前が裏側に墨書されており、文政6年(1823)にこの欄間が新調されたと考えられる。

4-2 上段の間、芭蕉の間にある付書院に関して ここでは、上段の間と芭蕉の間にある付書院について述べたい。古図では、芭蕉の間に付書院がなく、上段の間に付書院が記載されているが、現状では両方に付書院を確認できる。上段の間にある付書院1は、古図では付書院となっているが、現在の付書院1は床の間との位置が異なっており、取込み付書院となっている。この違いについて調査を行ったところ、背面側の書院柱、台輪、地覆に変更の痕跡は見られなかったため、客殿を建設する際に変更されたと考えられる。

芭蕉の間にある付書院2(写真2)については、図1の柱1に長押しに釘隠が柱真からずれて打たれているが、元の柱真部に穴がなか

った。また、柱2は縁側の長押しが、付書院2まで伸びており、釘隠は柱真からずれて打たれている(写真3)。付書院2の縁側には引戸1があり、鴨居の上には土壁が屋根まで塗りこめられていた(図1、写真2)。引戸1を調査すると付書院2の書院柱は引戸1の上框に合わせた形状となっている(写真4)。また、溝が背面寄りに彫られており、これは付書院2の存在を想定していると考えられる(写真5)。この溝のうち、正面側の溝には戸の下框による引っ掻き傷がなく、引戸1が開閉された痕跡が認められなかった。引戸1のうち、南側の戸を開けると付書院2の小脇があるために通過できないので、引戸1を開閉することはなかったと考えられる。

以上より、当初から付書院1と付書院2が存在していると考えられる。大乗寺には出石藩家老の仙石家の位牌が安置されていることを2で述べたが、その出石藩と隣地にある豊岡藩^{註18)}の政治的な折衝の場として大乗寺客殿で面会が行ったという寺伝がある。しかし、関連する文書を見出せず、5-1で述べる出石藩の公用執務日記『出石藩御用部屋日記』においても、関連する記述を確認できなかった。したがって、面会の実態は不明であり、付書院が2つ存在する理由を明らかにすることはできない。

4-3 藤の間について 現在、上段の間の背面にある藤の間と呼ばれている部屋は古図には記載されていない。現状の背面側の縁側だった部分を藤の間とすることで、部屋が1つ増えている。ここは慈照院客殿のように増築の事例がみられるため^{註19)}、増築の可能性が推察された。そこで、調査を行うと、柱には痕跡が認められなかった。次に、畳をはがして床板を観察すると、釘が打たれていた。これは、畳を敷くことが想定されていたことを示すものであり、増築の根拠を認めることができない。藤の間にある奥文鳴の障壁画は寛政7年(1795)に制作されたのではないかと河野氏が指摘している^{註20)}。よって、大乗寺客殿の建築が始まった後の制作と考えられるが、増築の痕跡がなく、再建当初から藤の間は計画されていたと考えられる。また、藤の間の北側に便所と浴室があるが、現住職によると、客殿が建設された寛政6年(1794)当時を再現したとのことである^{註21)}。

4-4 鯉の間について 現在、上段の間の南側に位置する鯉の間について、古図と比較すると2点の相違点がある。1つめは古図によれば、鯉の間は7畳半であり、背面側に縁側が取り付けられているが、現状では1室で11畳半となっており、右にある狗子の間と縁が連続していない。2つめは、古図にはトコが記載されていないのに対し、現状ではトコがある(写真6)。

現状をみると、東西の柱間寸法が畳割と一致しておらず、畳と敷居のあいだに木材を差し込むことで修正している。よって、この部屋はかつて東に向かってトコを含む畳5枚分の拡張があったのではないかと想定された。そこで、鯉の間の畳をはがして床板を確認したところ、トコの間をふくむ東側の畳には釘が打たれていたために畳を敷くことを想定していたと考えられる。また、柱3には、長押し、鴨居、敷居などの痕跡を認めることはできなかった。さらに、天井裏調査を行ったところ、柱3は梁が三方挿しになっており、取り替えることができないことがわかる(写真7)。

鯉の間の障壁画は図1のように8面が南から西をまわり、北に配されている。鯉の間の障壁画は天明7年(1787)5月15日に注文され、同年9月21日に完成した。その際に描かれた襖の数が8面であり、現在と合致していることが古文書により明らかになっている^{註22)}。つ



写真2 芭蕉の間 付書院2
(手前の柱が柱2、消火器の背後にあるのが引戸1である)

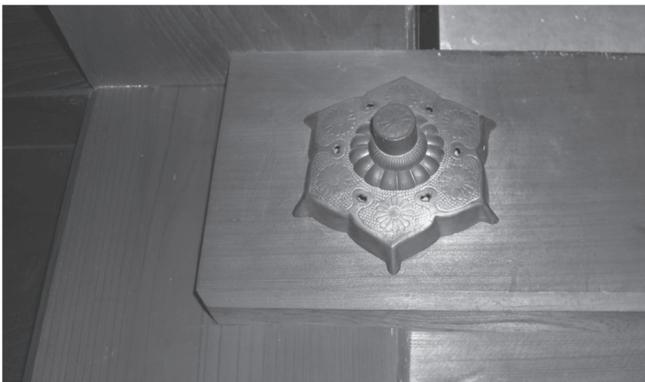


写真3 付書院2にある柱1の上端部

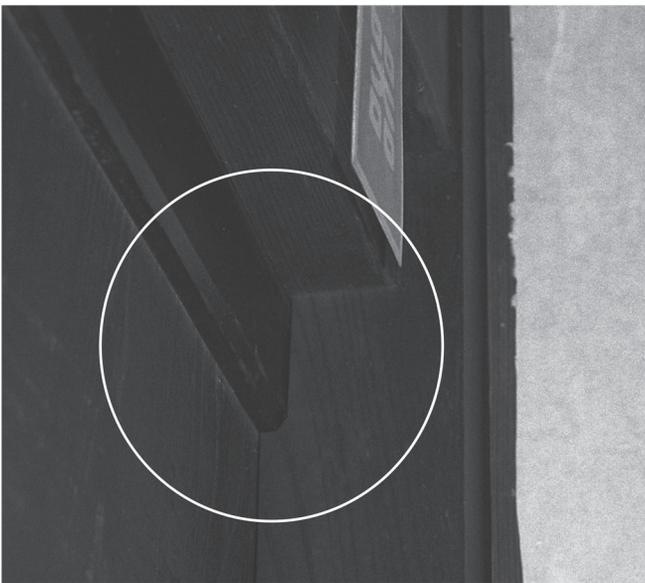


写真4 芭蕉の間 付書院2の背面側にある書院柱と引戸1の上框



写真5 付書院2の背面にある引戸1の敷居
(背面側から撮影した)

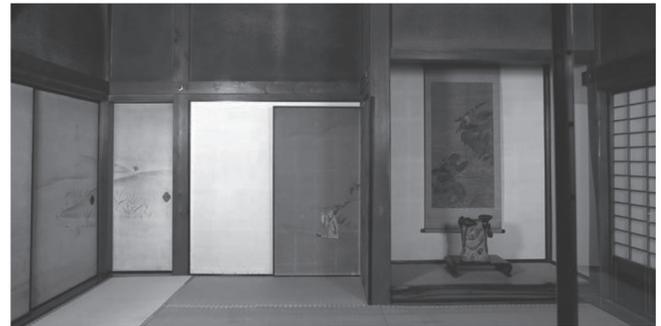


写真6 鯉の間の北側 障壁画は右から1, 2である。
(障壁画1を開けば、山水の間に出ることができる)



写真7 鯉の間の南側 障壁画は右から6, 7, 8である。



写真8 狗子の間の西側 障壁画は右から4, 5, 6, 7である。



写真9 庫裏の天井裏にあった仕口痕

まり、寛政6年(1794)に客殿が建築される以前に、障壁画が完成している。しかし、古図のとおり建築されても壁1は白壁となり、部屋全体を障壁画で埋めることはできない。

鯉の間にトコがある理由については、鯉の間の障壁画1が開閉可能であり、山水の間に出られることから鯉の間は控えの間という意味合いが与えられた室であると考えられる(写真6)。そのために背面に拡張し、装飾の意味でトコが設けられたと考えられる。

4-5 狗子の間について 鯉の間の南に位置する狗子の間は古図によると、「ヲシコミ」が北西部に記載されているが、現在は白壁である(写真8の右端)。この「ヲシコミ」が取り払われたために障壁画が不連続になったと河野氏が指摘している^{注23)}。

そこで、柱4、柱5の調査と床調査を行ったところ、痕跡を確認することはできなかったため、ヲシコミは建設される際から存在していなかったと考えられる。柱5の床下には束がなく、構造上の意味を成さない柱である(写真8)。また、狗子の間の障壁画については、天明7年(1787)9月8日付の画料受取証の存在が明らかにされている^{注24)}。つまり、鯉の間と同様に、客殿の建築より先に障壁画が完成しているといえる。

4-6 兀山の間について 狗子の間の西に位置する兀山の間は、古図では「諸講檀」と記入されている部分があるが、現状では痕跡を確認することができない。これは弘法大師の命日に御影供を行う際に設置される諸講檀であると考えられる。

兀山の間の障壁画については、天明7年8月25日付の画料受取証があり、狗子の間とほぼ同時期に完成している^{注25)}。諸講檀の裏側に位置する北面の壁には障壁画がなく、白壁となっている。これについて、先述の画料受取証をみると、「御婦すま拾四枚 群山露頂之懸畫」と書かれている。これは14枚の山頂の障壁画が描かれたことを示しており、現在も14枚の障壁画がある。よって、造営されたときは白壁に障壁画を設えていなかったといえる。

4-7 二階の猿の間、鴨の間について 大乗寺客殿の二階にある猿の間、鴨の間と呼ばれる部屋は古図には記載されておらず、二階への階段がある部屋は古図では「浴室」と記載されている(図2、図3)。そこで、痕跡調査を行ったところ、階段室および2階に増築の痕跡は認められなかった。縁側にある、外側の手すりには後補であったことが柱6の指物痕でわかるのみである(図2)。ところで、猿、鴨の間はどちらも置札に書かれる寛政6年(1794)より1年後の寛政7年(1795)に製作されたと推定されている^{注26)}。ここで、佐々木丞平氏が根拠とする書簡には、猿と鴨の間について「當春ハ方々出来之約ニ御座候所猶今出来不仕さて々々氣毒千萬奉存候思召候段も」

とあり、完成が約束より遅れて申し訳ないと記述されている。このことから考察すると、寛政6年(1794)の時には、障壁画が未完成であり、大乗寺が障壁画を待っていた状況であったと考えられる。

5 大乗寺客殿の庫裏について 大乗寺客殿の庫裏は土間、その東の板間、面蔵、その北にある居室1、土間の北にある20畳と12畳半の部屋を指す(図1)。ここでは、庫裏の突出部、居室2、居室1とその周辺について、順番に考察していくこととしたい。

5-1 庫裏の突出部について 現在の居室1と面蔵の背面側は庭になっているが、古図をみると突出部になっている(図1、2、3)。そこで、前住職の長谷部琢道上人が著した『大乗寺歴代記』^{注27)}(以下、『歴代記』)には「現今の竹の間面蔵を取り入れて更に東に六間に六間の突出部あり其中に廿五畳平間七畳半上段、付の書院、一間を始め寝蔵十二畳、奥寝蔵十畳(内一坪仏間)、料理間、廊下、等あり応筆筆、竹の間、全牡丹間、全雪の間、と呼びたるなり。此部分東の山崩れの為倒壊、(現存の建物も枕■をかけて引直せし事口碑として残り)せし為裏側応急改造の俣現今に及べり、」と記述されている。これは、「現在の居室1と面蔵より東側には六間と六間の突出部があり、そこには25畳の雪の間、7畳半の上段の間、1間の付書院、12畳の寝蔵である牡丹の間、10畳の奥寝蔵である竹の間(うち1坪は仏間)、料理の間、廊下などで構成されていて、竹、牡丹、雪の間は応筆筆である。この部分は東側の山崩れのために倒壊してしまったため(現在の客殿も修繕をしていると口伝がある)、応急修理を行い、現在に至っている。」と読み取れる。

そこで、古図を確認すると、突出部にある各部屋の畳数と配置は一致している^{注28)}。次に、天井裏調査を行ったところ、現在の庫裏の天井裏に突出部に伸びる仕口痕を2箇所確認できた(写真9)。また、突出部にのびる桁も切断痕がみられた。これらの痕跡より、庫裏の突出部は崩壊したと考えられる。その時期については、『歴代記』の密英上人の条で「上人建立後五十年内外の出来事ならんと推定し得らる」と記述されており、「密英による建築である寛政6年(1794)から50年を経た天保15年あるいは弘化元年(1844)を軸とした時期に倒壊したのではないかと読み取れる。そこで、柱7をみると外面に風喰が見られるため、長期間、外気に曝されていた時期があることがわかる。現住職によると、柱7の背面にある縁側は昭和期に増築されたとのことであった。また、居室1の足下に番付は記入されていなかった。よって、柱7が風化しているのは、庫裏の突出部が崩壊して時間が経過していることの傍証である。

崩壊した理由については、出石藩の公用執務日記である『御用部屋日記』によれば、文政13年(1830)8月1日に大乗寺のある美含郡が大雨に見舞われ、山崩れが発生しているが、庫裏の突出部も山崩れが原因で崩壊したかどうかは関連文書を見出せなかった^{注29)}。

崩壊した突出部の部材を転用して豊岡市福田にある新宮寺本堂を建てたと寺伝があるが、この建築は平成12年(2000)に再建されたために、建築調査を行うことはできない^{注30)}。しかし、新宮寺には文政期の寄進を示す墨書を確認できる釘隠が数点現存し、大乗寺から移されたと伝わる襖の引手金具が遺されていた。これを大乗寺の引手と比較すると、同一の意匠が認められた^{注31)}。また、須弥壇に「文政十二年六月 新宮四世幸前代新造宮」の銘が、本堂の欄間に「文政十三年十二月 伽藍造宮」の銘が記されている。この欄間

二枚には、本柱と欄間の意匠に大乘寺の芭蕉の間にある欄間と類似性が認められる。まとめると、新宮寺の須弥壇が造営された文政12年(1829)6月、あるいは伽藍が造営された文政13年(1830)12月を軸とする時期に大乘寺客殿の庫裏の突出部が崩壊し、残存した部材を新宮寺の旧本堂に転用したといえる。崩壊の時期は、文政13年(1830)8月の大雨による山崩れによる可能性が高いと考えられる。

5-2 居室2について 一階にある居室1から天井を見上げると、東西に二階梁が渡されているのが見え、二階の存在が想像されるが、これが居室2である(図2)。居室2を調査すると、柱8、9は通し柱であり、転用材ではないことがわかった。また、柱10、11、12は間柱であった(図4)。次に、柱8と柱9は指物の痕を認めることができ、柱8(写真10)については展開図を作成した(図5)。柱8には膝の高さに指物の痕があり、A面からB面にかけて天井廻縁の痕、B面からC面にかけて天井板のしゃくり溝の痕がある。柱9(写真11)にはE面に廻縁の痕、D面上端に指物の痕(写真12)がある。柱8と柱12の間には敷居、鴨居と襖があるが、鴨居の上にある内法貫には角釘が使われていた。最後に、柱10、11、12には背面側の表面を板で打ち付けて補強されていた。板の位置は何れも同じ高さであり、貫穴や小舞穴をふさいでいると考えられる(図4)。以上より、居室1は大乘寺客殿が完成した当時は突出部に伸び、居室1から柱8と柱9にある廻縁の痕跡までの高さを備えた空間であったが、5-1で述べたように庫裏の突出部が崩壊したあと、近代を遡る時期に居室2が作られたと考えられる。

5-3 居室1について 現在の大乗寺客殿には居室1があり、かつて竹の障壁画があったために、寺は「竹の間」と呼んでいる。『歴代記』には、「現今の竹の間面蔵を取り入れて更に東に六間に六間の突出部あり其中に廿五畳」とあり、その後「奥寝蔵十畳(内一坪仏間)」と記されていて、一つの文章で竹の間の名前が二ヶ所見られる。これは「現在の竹の間と面蔵より東側には6間と6間の突出部があり、そこには25畳の雪の間と10畳の奥寝蔵である竹の間(うち1坪は仏間)があった」と読み取れる。この点について分析したい。

まず、現状、古図、明治25年11月頃の座敷図を相互比較すると、座敷図に居室1が認められ、明治25年11月頃にはすでに存在していることがいえる(写真13)^{注32)}。また、『歴代記』の文と比較すると、居室1は「25畳の雪の間」の一部であると考えられる(図1と3)。また、「10畳の奥寝蔵である竹の間(うち1坪は仏間)」は、古図の「寝蔵奥部屋」と「内佛」の2部屋を指すと考えられる(図3)。

竹の間の障壁画については、大乘寺客殿障壁画の写真集『大乘寺静観』(光村写真部、明治34年(1901))によれば、竹の間障壁画として襖3枚・3枚・4枚の10枚の写真が掲載されている。そして、田島志一(編)『真美大観』(第14巻、日本真美協会、明治40年(1907))にも、「寛政五年初秋の作に係る竹の間等の障壁画あり」と落款から記述したと考えられる文がある。そして、浜田青陵は明治41年(1908)10月以前に大乘寺を訪問し、「竹の間(八畳)」について「見るを得ざりし」と存在を仄めかしつつも見学できなかったことを記している^{注33)}。しかし、現在において竹の障壁画の行方は不明である^{注34)}。

『歴代記』を記した長谷部琢道上人は明治33年頃には、大乘寺におり^{注35)}、『大乘寺静観』『真美大観』『國華』において竹の間の障壁画が紹介された時期を遡る。よって、『歴代記』で現在の居室1を「竹の間」と呼んでいる記述は信をおいてよいと考えられる。しかし、

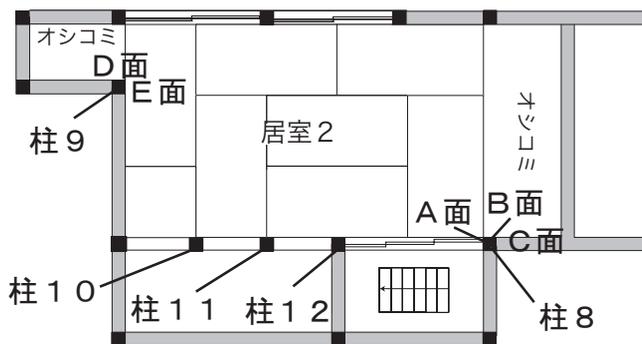


図4 居室2の平面図

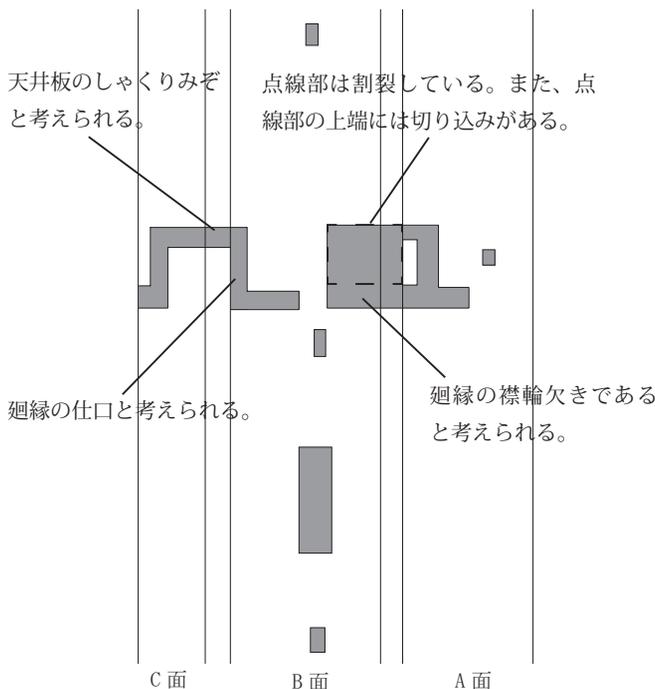


図5 柱8の指物痕に関する展開図



写真10 居室2にある柱8の指物痕周辺写真
左面がB面、右がA面である。



写真11 居室2にある柱9の全体
手前がE面、右側面がD面である。



写真12 居室2にある柱9のD面
(写真11の白丸の部分)

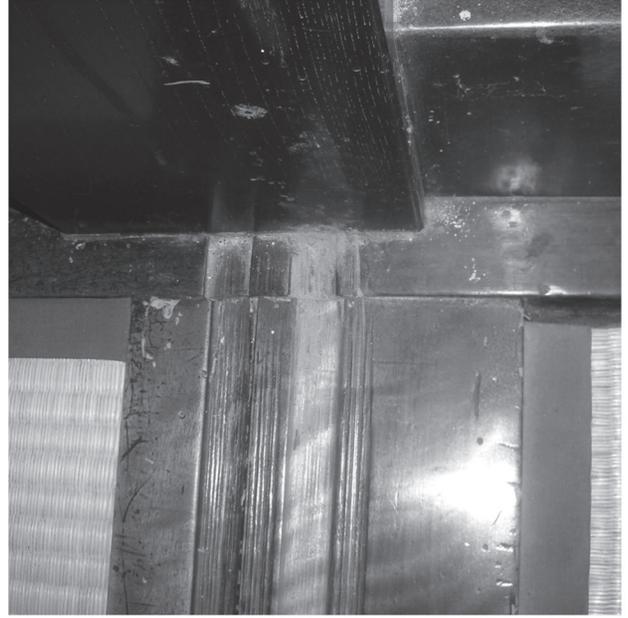


写真15 敷居1と敷居3が接続する部分(拡大)
(手前にある敷居は、敷居1である)

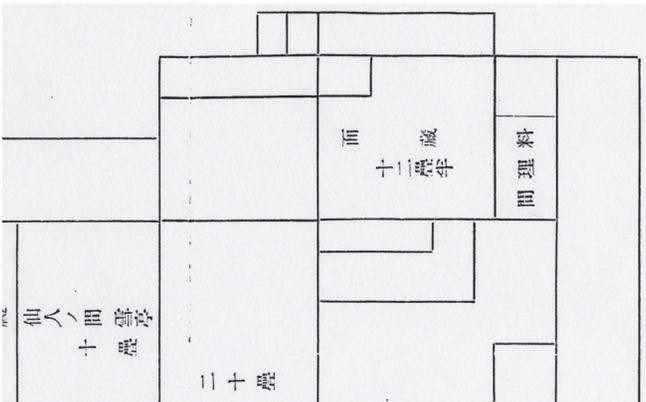


写真13 「但馬城崎郡香住村大乘寺座敷圖」より居室1の周辺



写真16 敷居1の正面側から天井を撮影した写真
(北東を向いて撮影、右側の天井廻縁は敷居1の真上にある。)



写真14 柱13と敷居1と敷居3が接続する部分



写真17 引戸2の全体写真



写真18 仙人の間から南東部をみた写真
(左から引戸2、柱15、壁2、右端の柱は柱13である。)

奥寝蔵を竹の間と呼んでいる根拠を見出すことができない。そこで、密英筆の文書『応挙画軸物』では応挙筆の襖として「墨繪竹 常学問處 六畳敷」と竹の障壁画が6畳の常学問處にあったと記され、これは古図でいう6畳の面蔵であると指摘されている^{注36)}。

ここでまとめると、客殿が建設された当初の居室1は25畳の雪の間であり、竹の間の障壁画は古図でいう「面蔵」にあったと考えられる。庫裏の突出部が失われても、障壁画は明治40年までは大乗寺にあった。その障壁画は面蔵から居室1に移され、保管あるいは転用されたことがあったために、居室1が現在に至るまで「竹の間」と呼ばれていると考えられる。

5-4 居室1の周辺について 居室1の正面側には階段室があり、柱13は敷居3の上に、柱14は敷居1の上に立てられているが、何れも半柱である。次に、敷居2と敷居3は襖を通すことができる(図1、写真14)。そして、敷居1は敷居3と柱13に接しているが、襖を柱13に接することができるよう、溝を敷居3に彫っている(写真15)。また、階段室の西側にある20畳の部屋は棹縁天井であり、棹縁が南北の方向にとめられている(写真16)。敷居1の真上にある廻縁に最も近い棹縁を観察すると、他の棹縁と等間隔ではなく、廻縁に近い位置にある。また、敷居1の真上にある廻縁は、丸みを帯びており、敷居2、3の真上にある角張った廻縁と意匠を異にしている(写真16)。

また、仙人の間の背面側にある縁には引戸2と柱15があり、物置となっている(写真17)。引戸2には敷居がなく、床板に溝を直接彫っている。物置を構成している壁2は板壁であり、角釘で留められている。以上より、この物置は近代を遡る時期の後補であると考えられる(写真18)。最後に、居室2の南側には居室3があるが(図2)、部屋全体に壁紙が貼られており、痕跡を確認できなかった。

以上より、5-1と5-3で述べたように、庫裏の突出部が崩壊した後に居室1が残ったと考えられるが、その周辺をみると、敷居1、柱13、柱14が設置され、階段室が構成されたと考えられる。また、物置を設置するために引戸2、柱15、壁2が取り付けられたといえる。つまり、居室1の周辺は古図と同様に建てられたと考えられる。

6 まとめ 大乗寺客殿について、現地調査と文書調査および既往研究を総合的に分析した結果、以下のことがいえる。

- 1、大乗寺は天明6年(1786)7月に密英による運営が始まり、大乗寺客殿は寛政6年(1794)3月16日に豊岡の彦四郎を後見とする但馬地方の大工らによって建築が開始された。
- 2、障壁画の注文・製作がされたのは天明7年(1787)8月から寛政7年(1795)までの8年間である。このうち、藤、猿、鴨、孔雀の間以外の障壁画は天明期に描かれている。このことから、図3の古図は天明7年8月以前に製作されたと考えられる。
- 3、大乗寺客殿の芭蕉の間にある付書院、藤の間、鯉の間、狗子の間、猿の間、鴨の間は後補ではなく、建築当初からである。
- 4、建築当時の庫裏の突出部は古図と同様であったと考えられるが、新宮寺旧本堂が造営される文政12年(1829)6月と文政13(1830)年12月を軸とする時期に山崩れのために崩壊した可能性がある。
- 5、居室2の柱8、9、10、11、12の指物痕より、庫裏の突出部が崩壊した後に居室2が作られたと考えられる。
- 6、居室1が「竹の間」と呼ばれている理由は、明治41年(1907)10月まで大乗寺にあったと思われる竹の間の障壁画が保管あるいは転用されたためだと考えられる。
- 7、敷居1、柱13、柱14、居室1の正面側にある階段室、物置の引戸2、柱15、壁2は近代を遡る時期の後補である。

謝辞

本研究は大乗寺の長谷部眞道住職、山唄眞應副住職、新宮寺の川端孝典御住職、香美町教育委員会の石松崇氏、味田晃氏、京都国立博物館学芸部企画室長の久保智康氏、和歌山県文化財センターの鳴海祥博氏、三井記念美術館の樋口一貴氏、横浜国立大学大学院都市イノベーション学府建築都市文化コースの大野敏准教授よりご協力・ご助言を頂きました。また、『出石藩御用日記』の読解には三好英樹氏(当時、京都府立大学大学院生)に、現地調査には安田徹也氏(当時、横浜国立大学大学院工学府社会空間システム学(建築)大学院生)にご尽力を頂きました。皆様に深謝申し上げます。本研究は平成20年度笹川科学研究助成(人文系)を受けました。

注

- 注1) 円山応挙(享保18年~寛政7年(1733-1795))江戸中期の画家。円山応挙の表記は旧表記の「圓山應舉」を採用する文献もあるが、ここではデータベースで検索する際の利便性から「円山応挙」とした。
- 注2) 大乗寺障壁画全体は昭和44年(1969)6月20日に国重要文化財指定を受けている。
- 注3) 密蔵(みつぞう 享保元年~天明6年(1716~1786))江戸中期の大乗寺住職である。
- 注4) 密英(みつえい 宝暦3年~享和2年(1753~1802))江戸中期の大乗寺住職であり、密蔵のあとを継いだ大乗寺住職である。
- 注5) 倉橋但斉『絵画円山派概説 大乗寺案内記』非売品、昭和40年(1965)味田晃、長谷部眞道『応挙・呉春・芦雪障壁画』兵庫県文化協会、昭和58年(1983)味田晃「大乗寺と円山応挙」但馬史研究、10号、但馬史研究会、昭和61年(1986)味田晃「亀居山大乗寺と円山応挙私考」歴史手帖 兵庫県の歴史、32号、pp.29~38、平成8年(1996)2月木下長宏「<失われた時>を見出すとき(三十三)」あまだむ、平成13年(2001)3月号、pp.4~6、平成13年(2001)木下長宏「<応挙寺[大乗寺]と美の運命>を討議するシンポジウムを開いたことについて」月刊あいだ、88号、pp.2~10、平成15年(2003)4月佐々木丞平・佐々木正子『至宝 大乗寺—円山応挙と其の一門』国書刊行会、

平成 15 年 (2003)
木下長宏「美」をみることは一 大乘寺の襖絵を例にして」Diatxt,
京都芸術センター, pp.10～19, 平成 15 年 (2003) 11 月
木下長宏「<失われた時>を見出すとき (五十二)」あまたむ, 平成 16 年
(2004) 5 月号, pp.2～4, 平成 16 年 (2004)
篠原聡「鑑賞教育再考 大乘寺の襖絵空間をめぐる」東海大学課程資格教育
センター論集, pp.23～34, Vol.4, 平成 18 年 (2006)
注 6) 國華 一〇〇号、二二一号、九四五号、一二〇五号、國華社
高崎富士彦「但馬の大乘寺」MUSEUM, 90 号, pp.24～27, 昭和 33 年 (1958)
橋本綾子「大乘寺 - 古寺巡礼」佛教藝術, 65 号, pp.71～80, 昭和 42 年 (1967)
佐々木丞平, 佐々木正子『円山応挙研究 研究篇 図録篇』中央公論美術出版,
平成 8 年 (1996)
注 7) 根立研介「兵庫・大乘寺 木造薬師如来坐像 一躯 木造四天王立像
四躯」京都美術史学, 1 号, pp.167～202, 平成 14 年 (2002) 1 月
注 8) 『近畿地方の近世社寺建築 5』(近世社寺建築調査報告集成 13), 東洋書林,
pp.90, 昭和 53～54 年 (1978-1979)
多淵, 中西「兵庫県近世社寺建築について 5 - 摂津・但馬・丹波の寺院建
築」日本建築学会学術講演梗概集計画系, pp.2003-2004, 昭和 55 年 (1980)
注 9) 大草一憲その他 2 名「近世臨済宗塔頭方丈と曹洞宗本堂について: 邸
宅風本堂の系譜と特質について」日本建築学会近畿支部研究報告集, 計画系,
40 号, pp.833～836, 2000 年
注 10) 屋根は昭和 12 年 (1937) に瓦葺となり、唐破風は柿葺であったことが
地元民の小幡勝治郎氏が撮影した写真 (香美町教育委員会蔵) で確認できる。
注 11) 部屋の名称については注 12 と図 1、図 2 を参照されたい。
また、大乘寺は公式ウェブサイト「大乘寺円山派デジタルミュージアム」に
おいて客殿内部のデジタルデータを公開しているので併せて参照されたい。
注 12) 大乘寺には以下の部屋ごとに円山応挙とその一門による画が收藏され
ている。以下、概略と注文された年を示したい。括弧は担当した絵師名で
ある。なお、年代については以下の文献を参照している。
河野その他「特輯 大乘寺の繪畫」國華, 九四五号, 昭和 47 年 (1972)
一階: 農耕 (呉春) 寛政 7 年 (1795)
使者 (規禮、守禮) 天明 7 年 (1787)
元山 (呉春) 天明 7 年 (1787)
佛間 (應瑞) 天明 7 年 (1787)
山水 (応挙) 天明 7 年 (1787) 12 月 明治 34 年 (1901)
甲種四等 国宝指 定
芭蕉 (応挙) 天明 8 年 (1788) 1 月 (佐々木丞平, 佐々木正子『円山 応
挙研究 研究篇 図録篇』中央公論美術出版, 平成 8 年 (1996), pp.168)
明治三十四年 (1901 年) 甲種四等 国宝指定
孔雀 (応挙) 寛政 7 年 (1795) 明治 34 年 (1901) 甲種四等 国宝
指定 京都で起った天明の大火で焼失後、書き直されたことが佐々木氏に
よって指摘されている。
藤 (文鳴) 河島元昭氏によって寛政 7 年 (1795) に制作されたの
ではないかと指摘されている (前掲 國華 九四五号)。
鯉 (應瑞) 天明 7 年 (1787)
狗子 (守禮) 天明 7 年 (1787)
仙人 (雪亭) 天明 7 年 (1787)
二階: 猿 (長澤蘆雪) 寛政 7 年 (1795) (前掲 國華 九四五号による)
鴨 (源琦) 寛政 7 年 (1795) (前掲 國華 九四五号による)
注 13) 『但馬新聞』明治 38 年 1 月 1 日から同年 3 月 22 日のあいだ、計五回
にわたって掲載された記事より
注 14) 長谷部琢道 (はせべ・たくどう 明治 21 年～昭和 42 年 (1888～
1967)) 昭和初期から中期にかけて大乘寺住職であった。
注 15) 大乘寺所蔵『歴代先師過去帳』(昭和三十九年九月二十八日作成) より
注 16) 佐々木丞平「圓山應舉と大乘寺 新出文書を手がかりとして」國華,
一二〇五号, pp.3～18, 平成 8 年 (1996) 佐々木氏は天明 6 年 7 月の証文
に「美含郡森村大乘寺無住ニ付」とあることから、大乘寺は無住であり、建
築は荒れて果てていただろうと指摘した。さらに、香住の七日市天満宮には
再興に関する棟札があり、日付が「天明五年乙巳十月廿二日」で、「開眼供
養導師別当大乘寺仏子密英心城房」とあり、密蔵が遷化する天明 6 年 2 月
より前に密英が大乘寺に関係していた。よって、証文にある「無住」は単に
住職が不在であることを指し、期間は 5 か月であったと考えられるため、天
明 6 年の時点で、大乘寺が無住のために荒れ果てていたとは考えにくい。ま
た、翌年の天明 7 年 5 月 1 5 日、密英は円山応挙に障壁画の制作を依頼する。
注 17) 河野元昭「大乘寺円山派關係文書 (特輯 大乘寺の繪畫)」國華,
九四五号, pp.74～80, 昭和 47 年 (1972)
注 18) 但馬国城崎郡豊岡 (現・兵庫県豊岡市) に置かれた外様大名京極氏の藩。

寛文 8 年 (1668) に丹後 (京都府) 田辺より京極高盛が 3 万 3000 石余で入
封している。城崎郡で 1 万石、美方郡が飛地で 5000 石余となった。
注 19) アンタリクサ, 日向進「近世後期における京都の臨済宗寺院の本堂 (客
殿, 方丈) に関する研究 平面の復原を中心に」京都工芸繊維大学工芸
学部研究報告 人文, 43 号, pp.121～140, 1994 年
注 20) 河野元昭「大乘寺と圓山派作家 (大乘寺と圓山派作家)」國華, 九四五号,
pp.3～11, 昭和 47 年 (1972)
注 21) 大乘寺の長谷部眞道御住職からの聞き取りによる。
注 22) 注 20 河野論文, pp.7
注 23) 注 20 河野論文, pp.8
注 24) 注 20 河野論文, pp.8
注 25) 注 20 河野論文, pp.9
注 26) 注 20 河野論文, pp.10
注 27) 墨で書かれている折本で大乘寺所蔵である。年代の表記に皇紀を使用
しており、昭和 20 年 (1945) 以前と考えられる。筆者は当時の大乘寺御住
職であった長谷部琢道上人である。行基から前住職の長谷部隆諦上人 (昭
和 3 年没) までの可能な限り、歴代住職とその業績を古文書や口碑を元に
まとめている。古い事跡については史料に基づいて記されている。
注 28) 『歴代記』では雪、牡丹、竹の間に畳数と部屋の名前を記入しているが、
この根拠となる史料を見出せない。國華の九四五号においても未検討である。
注 29) 出石町総務課町史編集室編『出石藩御用部屋日記 (CD-ROM 版)』出石町,
平成 16 年 (2004) によると、文政 13 年 8 月 3 日の条に、一昨日の日に
出石郡、養父郡、気多郡、美含郡で大雨があり、被害が出たことが伝えら
れる。また、10 月 15 日の条には「山拔崖崩 五千四百八拾四ヶ所」堂社潰 三ヶ所
と広範囲の被害が報告されるが、大乘寺の名前を確認できなかった。
注 30) 新宮寺には、本堂で使われていた松の床板が保管されていた。いず
れも面取りがされ、角釘が打たれている板もあった。既に新宮寺の旧本堂は
解体されている関係で当時の状況が把握できないのと墨書が確認できな
かったため、大乘寺との関係を示すことはできない。
注 31) 新宮寺本堂の襖の引き手と釘隠が同様に現存している。引き手が嵌め
られていた襖は焼却してしまったが、もともと須弥壇の両脇にある室にはめ
られていた襖で、向かって右側が竹に人物画で、左が鴨図の襖であったとい
う。しかしながら左の鴨図はサイズが新宮寺本堂の敷居・鴨居の長さと同
かず、襖の化粧縁の外側に木を嵌めて使用していたという。襖の引き手と釘
隠については、京都国立博物館学芸部企画室長の久保智康氏 (金工芸史) と
ともに検討したところ、引手の魚々子や葉の形の意匠から、大乘寺と新宮
寺で使われているものは共通していると考えられるという結論が得られた。
注 32) 明治 25 年 11 月の日付があるパンフレット『亀居山大乗寺略記』(大
乗寺蔵) は裏に「但馬城崎郡香住村大乘寺座敷圖」があり、この一部を
写真 1 3 に掲載した。面蔵と仙人の間は現在と位置を変えていないため、
面蔵の北側にある部屋は現在の居室 1 であると考えられる。
注 33) 浜田青陵「雑録」國華, 二二一号, pp.96～103 頁、明治四十一年十月
考古学者の浜田耕作 (明治 14 年～昭和 13 年 (1881-1938)) は竹の間を「八
畳」と規模を記しているが、注 32) の「座敷圖」で符合する部屋を確認す
ると居室 1 を指していると考えられる (ただし、居室 1 は 7 畳半である)。また、
階段室が記載されていないが、正面側に「二十畳」とあり、現状と一致して
いることと居室 2 の調査結果より、階段室は略されているものと考えられる。
注 34) 竹の間障壁画の行方については、三井南家九代目当主の三井高德 (明
治 7 年～昭和 12 年 (1874～1937)) が大乘寺から譲り受けたと寺伝がある。
三井文庫『三井家文化人名録』151～152 頁、2002 年によれば、「高德は
応挙の正伝をつくる決意をし、応挙と門人たちの資料を集めるため、但馬や
大津に人を派遣して古記録、古文書を渉写し (後略)」とあり、応挙に関心
を深く寄せ、但馬に人を派遣している。よって、大乘寺を知っていたと考え
られる。この逸話は、倉橋但斉『絵画円山派概説 大乘寺案内記』(111 頁) で
も確認できる。そこで、三井文庫の美術品を調査・展覧している三井記念
美術館の学芸員・樋口一貴氏のご協力のもと、調査を行ったところ、三井
記念美術館は三井南家の收藏品を全所蔵しているわけではなく、竹の間障
壁画の所在を明らかにできなかった。しかし三井高德は独学で絵を学び、
円山応挙の画風を慕って写生主義に傾倒しており、明治 36 年 (1903) には一
枚応挙の粉本を写し、合計千数百枚に達したと樋口氏からご示唆いただいた。
注 35) 注 13) の『但馬新聞』明治 38 年 2 月 8 日の記事によれば、「留守番
番琢堂」が山水の間障壁画盗難事件の第一発見者である。そこで、長谷部
琢道上人の墓碑には「実應上人弟子入寺十二歳」と刻まれており、これは
明治・大正期の大乘寺住職・長谷部實應 (弘化 2 年～大正 10 年 (1845-1921))
の弟子になったことを示す。注 14) より明治 21 年が生年であるので、
明治 33 年頃に大乘寺に入ったと考えられる。よって、「琢堂」と同一人物と
考えられる。
注 36) 注 17 河野論文, pp.79～80

(2011 年 2 月 10 日原稿受理, 2011 年 10 月 31 日採用決定)